コンテクストの多次元性と会話意の生成

— いわゆる「間接発話行為」再考 —

人文学部　福　田　一　雄

Dimensions of Context and Generations of Conversational Meaning

— A re-consideration of so-called indirect speech acts —

Kazuo FUKUDA (Faculty of Humanities)

Indirect speech acts are defined in J. R. Searle (1975:60) as "cases in which one illocutionary act is performed indirectly by way of performing another." The problem is whether the illocutions in question are exclusively based upon the speaker's intention, or if they are produced by a combination of contextual dimensions, the meaning of the utterance, and the addressee's interpretation of the conversational meaning, which could be essentially beyond the speaker's intention.

It is proposed that we should allow for variation within communicative acts, starting from the cline of strictly intention-bound acts on one end, to very loosely intention-bound on the other. These variants should be unified and placed within the same category of human communication. However, a completely non-intended conveyance of meanings should not be regarded as a communicative act, but rather as a mere expressive release of meaning.

Key concepts for our analysis are 'relevance', 'perlocution', 'generations of conversational meaning through interactions of the speaker and the addressee in dimensions of context', and 'strong vs. weak communication.'

Through the discussion, a pragmatic view of communicative contexts, as shown in Sperber and Wilson (1986 and 1995), is highlighted and then compared with other contextual viewpoints, such as those proposed in Halliday & Hasan (1985), Fukuda (1998), and Verschueren (1999).

0. はじめに

英語の動詞 'communicate' を英英辞典で調べてみると、次のようになっている。1. to make (opinions, feelings, information, etc.) known or understood by others. 2. to share or exchange opinions, feelings, information, etc. (*Longman Dictionary of Contemporary English,* 2nd ed.)。また別の辞書では、1. make something known; convey something. 2. exchange information, news, ideas, etc. (*Oxford Advanced Learner's Dictionary.* 4th ed.(興味深いことに、この辞書の最新版である第6版では1と2の順序が入れ替わっている)。両方の辞書に共通しているのは、最初の定義が、何かを知らせる、理解させる、伝えるという、話し手(便宜上、言語の使用者を書き手も含めて、話し手と呼び、受け手を読み手も含めて、聞き手という用語で代表させる)の側からのものであるのに比して、二番目の定義が、何かを伝え合う、共有するという、話し手・聞き手双方の側に立ったものであるという点である。'communicate' の名詞形である 'communication' の日本語訳として、「伝達」という用語が用いられることがあるが、どこかぴったりこない感じがするのは、「伝達」が辞書的定義の1番を示し、2番には当てはまらないからである。そのせいか、日本語でもそのまま「コミュニケーション」という語が頻繁に使われ、広く認知されている。

現代言語学で問題にするコミュニケーションの概念は、言語学的語用論(linguistic pragmatics あるいは pragmalinguistics と呼ばれるが、以下、単に語用論=pragmatics と呼ぶ)や機能言語学(functional linguistics)においても、上の辞書的定義の2番目に相当するものである。つまり、話し手が選ぶ発話の言語的意味および会話的意味を、聞き手がどのように解釈するかという点に焦点が当てられることになる。

いまや、語用論に関心を持つ研究者や学生には常識のようになっていることだが、最初に、言語の使用を一種の行為(act)と捉え、一般的発話行為理論(general speech act theory)の基礎を築いたのは Austin (1962) であった。Austin は発話行為の種類を発語行為(locutionary act)、発語内行為(illocutionary act)、発語媒介行為(perlocutionary act)に分けた。これらの中で、語用論的研究の中心となってきたのは、もっぱら発語内行為であった。発語内行為というのは、ある発話

(utterance) をすることによって、話し手が遂行する発話行為の種類のことである。たとえば、「私は福田です」と言えば、陳述（statement）という発話行為を遂行しているわけである。Austin の影響を受けたとされる Searle (1975) はこの発語内行為の種類を基準にして直接発話行為と間接発話行為を区別した。

本稿は、Searle の間接発話行為（indirect speech act）の概念を再検討し、直接と間接の二分法だけでは、コミュニケーションの諸相を十分に解明しきれないことを指摘し、それに代わる視点を検討しようとするものである。

1．間接発話行為の問題点

Searle (1975:60) は間接発話行為を次のように定義している。

（1） Indirect Speech Act: "... cases in which one illocutionary act is performed indirectly by way of performing another."
（間接発話行為：「一つの発語内行為がもう一つ別の発語内行為によって間接的に遂行されるような場合」のことである。）

Searle はこの間接的に遂行される方の発語内行為を一次的発語内行為（primary illocution）と呼び、もう一つの発語内行為を二次的発語内行為（secondary illocution）と呼んでいる。Searleの間接発話行為の概念は、たしかに次のような慣習的（conventional）な事例については説明力がある。

（2） Can you pass the salt？（そこの塩取ってくれる？）
（3） I am wondering if you can come to my office tomorrow.（明日、私の研究室に来れるかな。）
（4） I don't mind another glass of beer.（もう一杯ビールいただくよ。）

（2）は相手の能力についての質問をすることによって、要求という一次的発語内行為を遂行している間接発話行為である（ついでながら、このような形式の間接的要求は、日本語ではまれである）。（3）は陳述することによって、質問という

一次的発語内行為を遂行している。(4)では、陳述をすることによって、間接的に要求行為を遂行している例である。(2)〜(4)は慣習性の高い発話行為であり、「どちらのご出身ですか」「三重県です」といった、質問で質問を遂行し、陳述で陳述を遂行している直接発話行為とは区別される。以上の議論からも分かるように、Searleの間接発話行為の概念は、Halliday (1994) の用語を使えば、ムード構造 (mood structure) とそれが担う発話機能 (speech function) との関係に基づいたものである。つまり、もし、平叙ムードが陳述を、疑問ムードが質問を、命令ムードが命令を表していれば、それらは直接発話行為であるが、そうなっていない(2)〜(4)のような場合は、間接発話行為であるとされているのである。福田 (2002) で触れたように、Searleの間接発話行為はHalliday (1994) の選択体系機能理論 (systemic functional theory) では文法的メタファーの中の対人関係的メタファーとみなされている。一方、興味深いことに、Searle (1993) では、すべてのメタファーが間接発話行為の一種と解釈されている。

(2)〜(4)のような慣習性の高い事例については間接発話行為の概念が有効であることを見たが、実際の言語使用においては、そのように即座に間接発話行為のタイプが特定できるものばかりでないことは明らかである。次の(5)は間接発話行為の説明によく用いられるが、非慣習的な事例の典型であり、(2)〜(4)とは区別されるべきである。

(5) A: It's too hot in here. (社長室で、社長が秘書の目の前で:「ここは暑すぎるね」)
B: (Opening the window) (秘書:窓を開ける)

(5 A)は、(2)から(4)のような慣習的なケースとは言いがたい。なぜなら「ここは暑すぎるね」は平叙文で陳述をしているが、その一次的発語内行為が窓を開けるようにという要求であるとは特定できないからである。このようなケースは、まさにGrice (1975) やSperber and Wilson (1986) の言う推論 (inference) に基づく解釈が大きく関与する。(5 A) の社長の発話の一次的発語内行為が要求であるといかなる聞き手にも一義的に解釈できるならば、それは典型的な間接発話行為としての要求であると言える。しかしながら、(5 A) の解釈は、コンテクスト

と聞き手の推論に大きく左右されるものである。(5)のコンテクストの一側面は、社長と秘書という社会的関係である。部屋が暑すぎると社長が言っているのだから、涼しくするために何かしなくては、というのが協調的（cooperative）な秘書の一般的な反応であろう。ここで注意しなくてはならないことは、「何かする」というのはAustin (1962) の発語媒介行為の次元であるという点である。考えられる秘書の発語媒介行為の種類は次のように多様である（ただし、ｄとｅは、発語媒介行為が言語行為として具現している例であり、その他は非言語行為である)。

（6） a．窓を開ける。
b．エアコンのスイッチを入れる。
c．冷たいお茶を入れる。
d．天気や季節についての話を始める。
e．単に、「本当にそうですね」とだけ言う。
f．黙っている。

(5 B)で秘書が(6 a)、(6 b)、(6 c)の 発語媒介行為を選んだとすれば、秘書は社長の発話を間接的要求と解釈したと言える。他方、(6 d)、(6 e)、(6 f)が選ばれた場合、社長の発話が間接的要求として解釈されなかったか、またはそう解釈したが、協調的行為を阻害する何らかの条件があったかである。もし秘書が間接的要求と解釈しながら、(6 d)～(6 f) を選んだとするならば、非協力的な発語媒介行為を選んだことになる。その非協力性の度合いは、(6 d)、(6 e)、(6 f) の順に高くなる。

発話の解釈に焦点を当てた新しい語用論的な理論とされるSperber and Wilson (1986) の関連性理論は(5)のような事例をどのように説明できるだろうか。関連性理論は、発話の解釈の処理コストと関連性（relevance）についての認知的語用論である[1]。(5)の場合だと、聞き手である秘書の関連性解釈のプロセスは次のようになると思われる。

（7） 社長は「この部屋は暑すぎる」と言った。社長は、何らかの「関連性の見込み（presumption of relevance)」を伝えようとしているはずだ。秘書

は、その関連性が何かを推論によって得ようとする。秘書は自分の「認知環境（cognitive environment)」、即ち、百貨事典的知識やこれまでの経験や現在の状況等々からなる「想定集合（set of assumptions)」の中から、(5 A)の発話の関連性を得るために必要な想定だけを取り出す。つまり、〈「部屋が暑すぎる」〉〈社長が秘書である自分に向かってそう言っている〉〈たしかに部屋は暑過ぎる〉〈もっとも得やすい関連性は、社長は、暑さを何とかして欲しいという要求をしているということである〉〈この関連性解釈をさまたげる他の想定は存在しないので別の関連性を探す必要はない〉〈ゆえに最適関連性は「社長は要求している」である〉

関連性理論によれば、社長の発話が秘書の認知環境に変更を加えたのである[2]。つまり最少の発話処理コストで最適な関連性を得たことになる。この要求という関連性を得た後に、どのような反応、すなわち発語媒介行為を選ぶかという問題は、また別次元の問題である。要求という関連性を得たにも関わらず、単に「最近、暑い日が続きますね」とか単に「本当にそうですね」と言うだけですました場合や、なにも言わず黙っていたとすれば、そのような反応を選ぶためのなんらかの別の想定が秘書側にあるということになる。たとえば、「部屋がそれほど暑くない」、「暑い暑いは、社長の口癖」、「それまで、同じ発話があっても、なにもしなくて問題がなかった」、「常々、あるいはその日だけ、社長になんらかの悪意を抱いていた」等々である。関連性理論では、こういったこともすべて聞き手の想定集合の中に加えられる。ただし重要なことは、いったん社長が「要求」しているという関連性が得られた場合、その要求としての解釈を変更するような想定が存在しない限り、その「要求」としての解釈が変更されることはないという点である。

関連性理論でいう関連性は、一見Searle (1975)の言う発語内行為やGrice (1975)の言う含意(implicature)に似ている。しかし、もっとも異なる点は、発話行為理論における発語内効力は「要求」、「約束」、「断り」などに截然と分けようとする傾向があり、Griceの含意は「会話の協調原理」の下位マキシムに対する意図的違反(flouting) が前提となっているが、関連性理論は、そのような発語内行為の種類分けや、下位マキシム違反かどうかに関心がないという点である。関連性理論の提案する＜発話→コンテクスト→推論→関連性＞という解釈プロセスは、発話自

体の解読的意味という初発の言語的理解を前提とするものの、解釈全体の過程はむしろ人間の持っている一般的認知能力、すなわち一般的推論能力に依拠したものである。人間の一般的推論能力とは、たとえば「高い椅子を持ってきて、その上に登れば、高いところに手が届く」といったようなものであり、まだ言葉のおぼつかない2才児でもこの種の推論が可能である。つまり言語能力とは別種の一般的推論能力である。

発話の「意図」に関する関連性理論の考え方を見てみよう。関連性理論は意図明示的(ostensive)発話行為のみをコミュニケーションと捉え、意図明示的でない事例はコミュニケーションとして扱わない。「意図明示的」とはいったい何か。関連性理論によれば、情報意図（informative intention）だけではなく、伝達意図(communicative intention)を伝える段階において初めてその発話は意図明示的になると考えられている[3]。自分が好きな人の机をきれいに拭き、そこにきれいな花を生けるという行為をそっとくりかえしているだけでは、それは「好きだ」ということを明示的に伝えているわけではない。それは情報意図の段階にとどまり伝達意図の段階に達してはいない。なぜなら関連性理論で言う伝達意図とは、「話し手が情報意図を持っていることを顕在的に聞き手に伝え、聞き手は話し手の情報意図を認知し、さらに話し手は、聞き手が話し手の情報意図を認知していることを認知している」というレベルだからである。もしそうだとしたら、上例の（5A）における社長の「この部屋は暑すぎるね」という発話は、どのような意図を明示していると言えるのだろう。関連性理論のように「意図明示的」コミュニケーションだけに限定するならば、(5)や(6)を説明するのは難しいように思える。筆者は、関連性理論のアプローチに加えて、以下に示すような、発語媒介行為の適切性（perlocutionary appropriateness）という、言語そのものを離れた人間の一般的行動原理を提案したいと思う。

（8） 発語媒介行為の適切性原理 （Principle of Perlocutionary Appropriateness）
<u>他に妨害的な条件がない限り</u>、ある発話を聞いた時、聞き手は、話し手にとって好ましい方向の行動を取る。あるいは少なくとも話し手が不利益を被るような行動は取らない。

この原理は、発話によって引き起こされる反応や結果を表しているため、発語媒介行為の概念で捉えることができる。発語行為は統語論的、意味論的に適切な発話を行う行為そのものであり、発語内行為は、発話そのものにこめられた発話行為であるのに対して、発語媒介行為はそれら2つの発話行為の「結果(consequence)」である（Austin 1962：94-108参照)。これまでの語用論はもっぱら発語内行為、すなわち発話に込められた話者の意味（speaker's meaning）に焦点を当ててきた。しかし、そうしながらも、一方で、語用論的分析は、話し手の発話そのものだけではなく、聞き手の反応や行動を手がかりに当該の発話を聞き手がどのように解釈したかを論じることが多かった。このような解釈基準を本稿では発語媒介行為的基準（perlocutionary criterion）と呼ぶことにする。筆者はこの規準が語用論的研究の中でより正当に位置付けられるべきだと考えている。とりわけ、Brown and Levinson（1978）に始まるポライトネス理論の研究にとっても、ここでいう発話媒介行為的規準の導入が有意義だと筆者は考えている。なぜなら、第三者としての研究者・分析者だけではなく、発話の参与者としての話し手・聞き手も、発話の結果としての相手の心理的反応や実際の行動を観察しながら、コミュニケーションを取っていると考えられるからである。

関連性理論は、聞き手の関連性解釈に最大の重点を置いている。そして人間の一般認知機構のありかたとして、解釈の処理コストが少なければ少ないほど関連性が高いとする。少ない処理コストを妨害するコンテクストがあれば当然、さらに処理コストを増やさねばならないが、その場合それに見合う関連性がなければならない。関連性の推論はコンテクストすなわち想定集合に照らして行われるのだから、正しい想定や正しい推論ばかりではない。関連性理論は間違った想定や間違って得た関連性も、聞き手にとっての関連性として扱えるのである。この柔軟性において関連性理論は「話し手の言いたいことを聞き手が正しく解釈する」ことだけをコミュニケーションと考えるコード・モデル的立場とは異なるのである。関連性理論と筆者の提案する発語媒介行為の適切性原理から、上の(５)、(６)は次のように説明される。(５Ａ)の社長の発話を聞いた秘書は、まず、社長が実際に「要求」の意図を持っていたかどうかにかかわらず、社長は何らかの関連性の見込みを伝えようとしているはずだという想定から出発して、その関連性を追求し始めるのである。「部屋は暑い」、「役割関係は社長と秘書である」などのコン

テクストから、社長の「要求」という関連性を得るのである。結果として秘書が選択する可能な発語媒介行為は、(6 a)～(6 f)などが考えられるが、筆者が(8)で提案した「発語媒介行為の適切性原則」から「窓を開ける」や「エアコンのスイッチを入れる」や「冷たいお茶を入れる」等が選ばれるのが普通であろう。もちろん社長の発話の「暑すぎる」の中の「すぎる」が示す程度的意味も関連性を得やすくする手がかりとなっている。また秘書の行動にLeech (1983) が言うような気配り (tact) が働くのは不思議ではない。この気配りという概念も(8)の原則に含まれる一要素である。

Searle (1975) の間接発話行為はすでに述べたように慣習的な事例には説明力があるが、(5)のような非慣習的な事例を十分説明できないと思われる。

すでにこれまで、コンテクストという用語を厳密な定義なしに何度か用いてきた。会話意の生成と解釈はコンテクストに大きく依存している。次節では、福田 (1998)、Halliday and Hasan (1985)、Verschueren (1999) でのコンテクスト論を取り上げ、それらをSperber and Wilson (1986) の関連性理論におけるコンテクスト概念と比較する。

2. コンテクストの多次元性

日本語の「文脈」という語は「文」の部分がどうしても言語的 (verbal) な脈絡のみを含意せざるを得ないため、語用論的議論においては、'context' はそのまま「コンテクスト」と表示され、原語が有する「テクストと共にあるもの」としての意味で用いられている。しかし、テクストと共にあるものとしてのコンテクストとは何かという点については幾つかの異なった考え方がある。

福田 (1998:21-22) はコンテクストの種類を次のように分類した (そこでは「文脈」という用語を使っていたが、本稿では「コンテクスト」で統一する)。

(9) a. 直接言語コンテクスト
b. 拡大言語コンテクスト
c. 直接状況コンテクスト
d. 拡大状況コンテクスト

e．世界知識

（9 a）は、あるひとまとまりの談話の中で、先行する発話、現在進行中の発話、後続する発話を指す。（9 b）は当該のひとまとまりの談話より以前の、別の独立した談話が形成するコンテクストのことである。たとえば、何日か前に言われたことや、別のテクストなどを示す。（9 c）は当該の談話が進行している時空間および会話の参与者間の諸関係のことである。（9 d）は物理空間を例に取れば、直接状況コンテクストを同心円状に取り囲むさまざまな拡大的状況である。例えば、大学の「講義室」が直接状況であるとすると、拡大状況はそれを取り囲む「新潟大学」、「新潟市」、「日本」、「東アジア」、「世界」、「宇宙」等々になる。（9 e）は関連性理論で言う「百貨事典的知識」に相当するものである。たとえば、レストランという言葉を耳にすれば、そこにはテーブルや椅子があり、ウエイトレス、ウエイター、料理人がいるというような知識の総体である。福田（1998）のようにコンテクストを言語的なものと状況的なものに分けるのが一般的なコンテクスト観である。筆者は、包括性と簡潔性という点において、この分類を現在も踏襲しているが、「文化のコンテクスト」の扱いに関してはさらに考える余地があると思っている。

次に、Halliday and Hasan（1985：44-49）の選択体系機能理論におけるコンテクスト論を見てみよう。その分類は以下のようになっている。

(10) a．状況のコンテクスト（the context of situation）
b．文化のコンテクスト（the context of culture）
c．間テクスト的コンテクスト（the 'intertextual' context）
d．テクスト内的コンテクスト（the 'intertextual' context）

これらを福田（1998）と比較すると、(10 a）は直接状況コンテクストに相当し、(10 b）は拡大状況コンテクストおよび世界知識に近いものである。さらに(10 c）は拡大言語文脈に、(10 d）は直接言語文脈に相当すると言える。ただし、(10 c）の「間テクスト的コンテクスト」の概念は注意を要する。ただ単に当該のテクストと別種のテクストとの関係というのではなく、別種のテクストが当該のテクス

トの中にそのまま混入しているということが重要なのである。テクストによる意味生成はつねにあらたな素材だけを使ってなされているのではない。言語システム自体も社会的に制度化された存在であるが、それと同時に一つのテクストには、他者が作ったテクスト、ことわざ、決まり文句などがそのまま使用されている場合が多い。山口（2000a:15）は「我々は、テクストを産出するたびに、あらたな意味のしかたを求めて絶えずシステムからすべての意味要素を選択するのではなく、既に必要とされる意味を含んでいる既存のテクストをそのまま用いるというのが、対人的相互作用の効率からいっても理にかなっていると言えよう」と述べている。さらに、選択体系機能理論は、特に(10ａ)と(10ｄ)に関しては、独自の理論を構築している。まず(10ａ)の「状況のコンテクスト」は、テクストの使用域（register）を指定する役割を果たす三つの特性から構成される。つまり活動領域（field)、役割関係（tenor)、伝達様式（mode）である。山口(2000a: 11-13)は「状況」と「使用域」の関係とその区別について次のようにまとめている。

(11)　＜状況＞

- ○　一次的活動領域（いまどのような対人的相互作用がおこなわれているのか）
- ○　一次的役割関係（その場合の相互の対人的役割はなにか）
- ○　一次的伝達様式（その対人的相互作用はどのような伝達媒体をとおしておこなわれているのか）

(12)　＜使用域＞

- ○　二次的活動領域（対人的相互作用でなにが話題とされているか）
- ○　二次的役割関係（相互作用者が互いにどのような発話役割を担っているか）
- ○　二次的伝達様式(用いられている言語がより口語的かより文語的か)

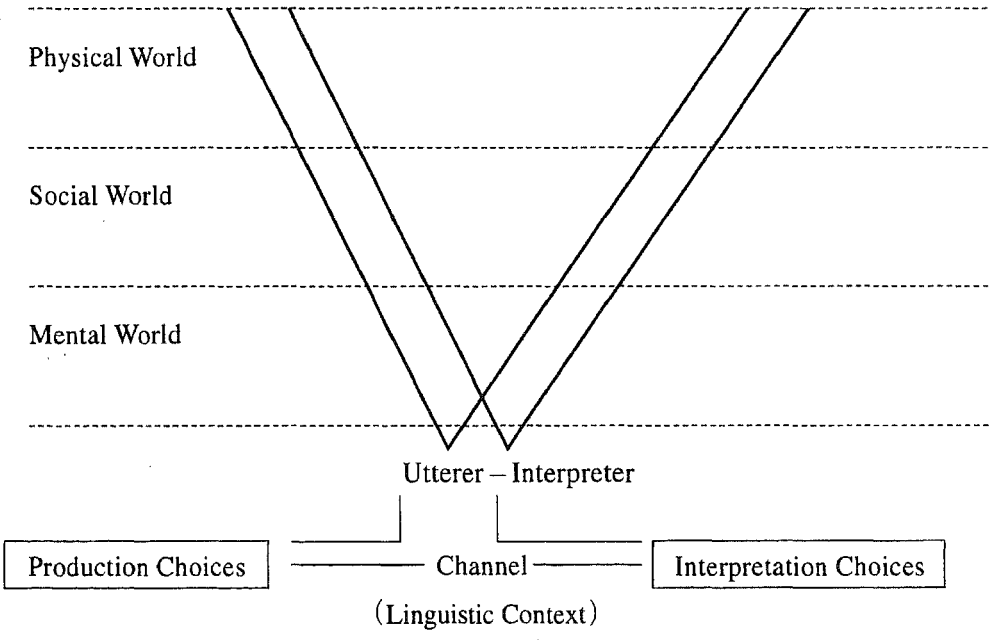
こうして(11)と(12)を並べてみると、状況を規定するものと使用域を規定するものとの間には深い関係がある。対人的相互作用の観点から規定された状況の3要素は話し手の言語選択以前の客観的状況であり、一方、使用域の方は話し手の

言語選択に直接関わる要因であることが分かる。その意味で、状況の存在なしには、使用域も特定できないということである。

Halliday and Hasan（1985）によれば(10 d)のテクスト内コンテクストとは、テクスト内の首尾一貫性（coherence）に関わるものであり、それはテクスト内部の意味的関係を具現する言語的結束性（linguistic cohesion）を含むものとされる。

次に、最近の語用論的コンテクスト論の一例として、Verschueren（1999）の考え方を見てみよう。Verschueren（1999）の議論の一つの特徴は、Halliday and Hasan (1985)とは違って、「文化のコンテクスト」を独立させていない点である。もう一つの特徴は、会話参与者の個人的な気分をもコンテクストの要素に含めていることである。さらにもっとも興味深い点は、話し手・聞き手それぞれの世界観に相当する概念を、'line of vision' と呼び、分かりやすくイメージ化している点である。Verschueren (1999) のコンテクスト観は次のようなものである。

(13)　Verschueren (1999:76) における「コンテクスト」



Verschueren(1999: 75-114)はコミュニカティヴ・コンテクストを構成する要素として、以下のものを挙げている。福田（1998）やHalliday and Hasan（1985）と比較されたい。

(14) a．言語使用者：発話者と解釈者
b．心的世界：社会的精神および個人の精神状態
c．社会的世界：態度的ダイクシス（つまり社会的ダイクシス）および社会的な仕組み、文化
d．物理的世界：時間と空間。言語使用者の身体的な姿勢やしぐさ、目つき、外観、健康状態、生物学的特徴などが含まれる。
e．言語的回路：言語音、話し言葉・書き言葉
および言語的コンテクスト
f．間テクスト性

上の(10)で見たようにHalliday and Hasan（1985）の選択体系機能理論では、「文化のコンテクスト」は独自に一項を設けられている。山口(2000a:13)の解説によれば、選択体系機能理論における文化のコンテクストは、「価値観の集合体であり、伝統的に確立している価値観とそれに対抗拮抗するイデオロギー的価値観からなる」とされる。この「価値観の集合体」という文化の捉え方も、さらにそれを伝統と反伝統の拮抗と捉えている点も極めて興味深い。一方、Verschueren（1999:92）はコンテクストとしての「文化」の概念に対して慎重である。彼は次のように言う。'Be careful not to unduly reify or mythologize cultures as real-world "entities."'（文化というものを現実世界の実体であるかのように不当に具象化したり、神話化したりしないように注意せよ）。この言葉は、語用論や社会言語学において散見される文化還元主義あるいは文化精算主義的な論述に対する警告となっている。「恥の文化」、「縦社会の文化」、「謙遜の文化」などの抽象度の高い概念を利用する時は最大の注意が要るということである。しかし、Verschuerenのこの警鐘も選択体系機能理論の言う意味での「文化のコンテクスト」となんら矛盾するものではない。価値観の集合体としての文化が言語使用に及ぼす影響は強力なものがあり、むしろそのような価値観がテクストにどう具現しているかを研究することは極めて有

意義だと考えられる。いずれにせよ、Verschueren (1999) は考え得るありとあらゆるコンテクストの要素を列挙している。(13)のスキーマにおける発話者と解釈者の両者から伸び広がっている世界観(line of vision)に注目したい。二つのヴィジョンの多くは重なり合っているが、左右にずれて重なり合わない部分がある。多くは共有されているものの、個と個の間の世界観は微妙にずれていることを表示している。共有部分は物理的世界がもっとも大きく、社会的世界、心的世界と下に行くにつれて小さくなっていくように、このスキーマは構成されている。同じ言語的回路を使用していても、理解不可能な状態が生じるのはこのずれによる。一方、個々人の世界観の違いにもかかわらず日常のコミュニケーションが基本的に驚くほど成功しているのは、この共有部分の大きさのためである。さらに、ずれの部分が、他者に対する想像力 (imagination) によって補われることを通じて、コミュニケーションはさらにその成功率を高めるのである。極端な理解不可能状態があるとすれば、狂信的な政治的、宗教的対立が生じた場合などであり、その場合、Verschueren のスキーマの二つのヴィジョンの重複部分が極めて少なくなるわけである。

最後に Sperber and Wilson (1986:141その他参照) のコンテクスト観について考えてみよう。福田 (1996:17) でも述べたように、関連性理論におけるコンテクストは以下の要素からなる。

(15) a. 当該の談話中の直接的な言語的先行文脈（短期記憶として貯蔵）に基づく想定
b. 長期記憶として蓄えられている百貨事典的知識に基づく想定
c. 非言語的なその場の知覚的状況（つまり物理的環境）に基づく想定

関連性理論の「コンテクストの要素」はこれまで検討したいくつかのコンテクスト論に比してもっとも単純化されてはいるが、その捉え方は独特である。関連性理論はコンテクストをわれわれの認知装置内の想定の問題と捉え、さらに一般的推論や発話理解の推論のためには、全ての想定が利用されるわけではなく、当該の発話の関連性を推論するために役立つ想定のみが用いられるという視点を取っている。したがって、全体としてのコンテクストとは(15)から得られる「想

定の集合」（言い換えれば「認知環境」）のことであるが、当該の関連性の追求のためには、その中の必要な想定のみがコンテクストとして選ばれるという見方を取る。従って、会話のやりとりが進行するにつれて、次々と新たな想定が加わったり、想定が修正されたり、想定が破棄されたりしながら、刻々コンテクストが動いていくことになる。このような動態的コンテクスト論が関連性理論の特徴の一つであり、コンテクストが「発話の解釈に先立って、前もって決定されている」とする従来の多くのコンテクスト観と対立するのである（Sperber and Wilson 1986：137 その他参照）。

以上、福田（1998）、Halliday and Hasan（1985）、Verschueren（1999）、Sperber and Wilson（1986）のコンテクスト観を比較してきた。それらの異同をまとめて示すと次のようになる。

(16)　コンテクスト論の比較

福田 (1998)	Halliday and Hasan (1985)	Verschueren (1999)	Sperber and Wilson (1986)
直接言語	テクスト内	言語回路・ 直接言語	直接言語
拡大言語	間テクスト	間テクスト	
直接状況	状　況	物理的・社会的・ 心的世界	直接的知覚環境
拡大状況	状　況	物理的・社会的・ 心的世界	
世界知識		物理的・社会的・ 心的世界	百貨事典的知識
	文　化		
		言語使用者	

(16)では、微妙に異なる分類をあえて一つの表にまとめたため、それぞれが完全に対応するわけではないが、これらの中で、Verschueren（1999）のコンテクスト

要素の分類規準が独特であることが分かる。彼の言う物理的・社会的・心的世界は、言語的コンテクスト以外にはすべて関係があるように思える。Halliday and Hasan（1985）では、Verschuerenの「社会的世界」は「状況のコンテクスト」の中の役割関係（tenor）で扱われる。一方、Verschuerenの「心的世界」という概念は、あまりに広すぎる概念ではないだろうか。その概念は間主観性(intersubjectivity)に似た概念から個人の気分に至るまでの広い範囲を含んでいる。そのため上の(16)では「状況」にも「世界知識」にも対応するものとみなした。またVerschuerenの言語回路は(16)では「直接言語コンテクスト」に対応させたが、言語回路は、Halliday and Hasan (1985) では、「状況のコンテクスト」の中の伝達様式（mode）として扱われている。また際立った特徴として、Halliday and Hasanが「文化のコンテクスト」を独立させている代わりに、「世界知識」や「百貨事典知識」を挙げていないという点である。この点が他の三つのコンテクスト論と異なる。関連性理論は文化的な要因をほとんど扱わないのが特徴である。また、Verschuerenはコンテクストの構成要素として「言語使用者」つまり「発話者」と「解釈者」を挙げているが、それはHalliday and Hasanや福田（1998）のように「状況」のコンテスト内で処理できる要素であるため、独立させる必要はないと考える。ただし、Verschuerenの(13)のスキーマの最下段で発話者は発話を「選び」、解釈者は解釈を「選ぶ」という関係を明示している点は的を射ている。

このようにいくつかのコンテクスト論を掲げたのには理由がある。それは第一に、本稿のテーマであるSearleの言う間接発話行為が、二重の発語内行為を遂行するものとして捉えられていて、これは間接要求である、これは間接拒否である、といったように説明されるのだが、本節で検討したコンテクストの多様な次元を前提にすれば、発話行為が「直接」か「間接」かだけでは、会話の意味生成を十分に説明できないことを示す意図があったからである。間接発話行為の種類を特定するという観点を取るよりも、多次元的なコンテクストの中から選ばれたコンテクスト（つまり想定）に基づく推論を通じて最適関連性を得るという関連性理論の視点の方が、コミュニケーションをより包括的に説明し得ると考えたからである。もう一つは、コンテクストなどなくても、言語的意味、あるいは認知的意味は、常に特定できるとする形式言語学的立場の主張に対して、そうではないと言いたいためである。たとえば、'He did it' という文は 'He'、'did'、'it' が何を指す

のか、またその行為がいつどこで行われたのか等のコンテクスト情報が存在しなければ真理値の決定の仕様もないのである。つまり発話のコンテクストを有する聞き手には即理解可能だが、コンテクストを持たない聞き手にはこの文は全く文意不確定なのである。ましてやGriceの言う含意もSperber and Wilsonの言う関連性もまったく不明なのである。

もう一つ、言語はコンテクスト次第で多種多様な含意を無限に生じ、コンテクストはかえって言語の意味を曖昧模糊にしているのであるから、コンテクストを言語研究に持ち込むべきではないと考える人もいるかも知れない。それはまったく逆なのである。わたし達はコンテクストの中で生きているからこそ言語の意味を正確に理解できるのである。この点に関連してVerschuerenは次のように述べている。

(17) In isolation, just about all utterances are highly indeterminate because of the multiplicity of contextual constellations they can fit into. Far from introducing vagueness, allowing context into linguistic analysis is therefore a prerequisite for precision. (Verschueren 1999:111)
(孤立した状態では、ほとんどすべての発話は極めて意味不確定なものである。なぜなら、それらの発話が占めるべきコンテクスト上の位置があまりにも多様であるからである。だからこそ、コンテクストを言語の分析に導入することは、曖昧さをもたらすどころか、正確を期すための前提条件なのである。)

さらに言語を生きたコンテクストの中で考察する際には、山口(2000b:189)が指摘するように、コンテクストを「単に理念的な場」として捉えるだけでは決定的に不十分なのである。たとえば「その文の解釈はコンテクストによる」と言うのみで立ち止まっていては無意味である。あるいは理想化された「自然なコンテクスト」をただ想像するだけで文の文法性の適否を判断するだけでは不十分である。そのような観点からも、本節で示したコンテクストの諸相を実際のテクストの分析を通じて、その具現の仕方を深く探ることが求められる。

3．意味現象のパラダイム

何かを意味するということはどういうことであろうか。本節では意味現象の諸相について考えることにする。次の会話はSearle の言う直接発話行為、あるいはHalliday（1994）の言うもっとも「自然（natural)」でかつ「一致（congruent)」した発話からなると仮定しよう。

(18)　a．どちらのご出身ですか。
　　b．三重県です。

(18 a)は疑問ムードで質問をし、(18 b)は平叙ムードで陳述をしている。次の(19)は、すでに見たように、Searleの間接発話行為の概念がもっともよく当てはまる慣習的発話行為であり、(20)は、逆に間接発話行為では十分説明できない非慣習的な事例である。

(19)　a．Can you pass the salt？(＝2)
　　b．Have a nice evening.

(19 a)は疑問ムードで質問することにより、「要求」という一次的発語内行為を遂行している。(19 b)は命令ムードで命令をすることで、「祈念」の一次的発語内行為を遂行している。(19 a) も (19 b)も英語という個別言語の中で慣習化されている間接発話行為である。一方、(20)は非慣習的な発話行為と言えるもので、その含意はコンテクストによって多様に変化する。

(20)　a．It's too hot in here.（＝5 A）
　　b．I am very tired.

(20 a)、(20 b)とも、Searleの一次的発語内行為、またはGriceの含意、またはSperber and Wilsonの関連性を得るためには、コンテクストに基づいた推論が必要となる。では、独り言の場合はどうなるのだろう。聞き手を目の前にした独り言

は方略的とも非方略的とも考えられる。方略的であった場合、それはBrown and Levinson (1978) の言うオフ・レコード (off record) による消極的ポライトネス (negative politeness) である。次の例を見てみよう。

(21) a. Ah, I am at a loss. (ああ、困ったなあ)
b. Ah, how should I get along from tomorrow on ?
(ああ、あしたから、どうしようかなあ)

聞き手の目の前で、(21 a)や(21 b)を発話することは、たとえ独り言的で、発話意図が曖昧であったとしても、なんらかの関連性を生じさせる可能性のあることは話し手も分かっているはずである。その曖昧な発話から生じる関連性を聞き手は、関連性理論の言う「関連性の見込み」に基づいて解釈すると同時に、第1節の(8)で提案した「発語媒介行為の適切性原理」によって、助言や手助けの行為を選択することが考えられる。

以上の(18)～(21)までの事例はコミュニケーションの範疇に入ると言ってよい。関連性理論は意図明示推論的コミュニケーションのみを考察の対象としているが、本稿では(21)のような独り言も方略的意図の有無に関わらずコミュニケーションの範疇に含めることにする。次に、(21)の発話を聞き手がたまたま立ち聞き (eavesdropping) した場合を考えてみよう。それでもその聞き手には「発語媒介行為の適切性原理」が働く可能性は排除できない。しかし、当の話し手は、誰もいない場所での独り言がなんらかの関連性や文脈的意味を伝え得るとはまったく意識していない点において、この場合は、コミュニケーションの範疇には入らないと言える。つまり意味は伝え得るが、コミュニケーションではないということである。

(18)～(21)は、独り言の立ち聞きの場合も含めて、すべて言語的な意味伝達の事例であったが、次に非言語的な意味現象を考えてみよう。3種類の現象が考えられる。一つは、交通信号のように、唯一的に符号化され、唯一的に意図されている意味である。もう一つは、指をさす行為やくんくん臭いをかぐ行為、あるいはヘアスタイルや服装である。これらが伝える意味は明確なものから曖昧なものまで幅があるが、共通していることは、これらの行為がすべて意識的な行為であ

り、なんらかの関連性を生み出す可能性がある点である。最後に無意識的な行為が考えられる。思わずあくびをする、おなかが音を立てる、頭をかく、つまずいて倒れる、どもる、等である。これらの行為もなんらかの関連性や含意を伝えうるが、共通しているのはすべて無意識的という点である。これら三つの非言語的意味現象の中で、コミュニケーションの範疇に入るのは前二者だけである。以上の意味現象のタイプを整理すると次のようになる。

(22)　意味現象のパラダイム

1．言語的意味伝達

A．直接発話行為（＝18）

B．間接発話行為（＝19）―― 慣習的なもの

C．非慣習的な発話行為（＝20）

D．独り言（＝21）（聞き手の存在）―― オフ・レコードによる方略、あるいは非方略の両様がある。

E．独り言（＝21）（聞き手の不在、あるいは聞き手は話し手自身）

（A～Dをコミュニケーションの範疇に入れる）

2．非言語的意味伝達

A．交通信号など

B．指さし行為や服装など

C．無意識的・非意図的行為：おなかが音を立てる、どもる、つまずく、等々

（AとBをコミュニケーションの範疇に入れる）

コミュニケーションと非コミュニケーションとを分ける基準が明らかになったと思う。それは関連性あるいは文脈的意味を他者に伝えるだろうという認識が「意味する側」にあるかどうかということである。関連性理論は情報意図と伝達意図を区別し、伝達意図の在る場合のみを意図明示推論的コミュニケーションとして考察の対象にしているが、本稿ではコミュニケーション概念をさらに広く捉え、

少しでも情報意図がある段階からコミュニケーションに含めることにした。その理由は、聞き手は「関連性の見込み」と(8)の「発語媒介行為の適切性原理」に基づいて、話し手の明確な伝達意図はもちろん、もっとも曖昧なかすかな情報意図に至るまで、話し手の意図、言い換えれば関連性を推論し、同定しようとするからである。

このような視点から見れば、Searleの直接発話行為と間接発話行為の区分はあまりにも大まかな区分と言える。たとえば、本稿で直接発話行為の例として挙げた(18a)の「どちらのご出身ですか」という疑問文も、コンテクストによっては、いくつかの異なった関連性を有する発話になる。そして、それらはいずれも間接発話行為の種類の特定という視点では説明できないものである。

(23) どちらのご出身ですか。

a. 純粋な情報要求の質問（役所のカウンターなどで）

b. 驚きを伴っての質問（どうみても日本人なのに、日本生まれじゃないと聞いて）

c. ある推測を確かめるための質問（言葉のなまりから関西地方出身だと予測して）

d. あなたがどこの出身地か考えてもみてよ、関西人なのだからこんなこと知っていて当然ですよ、というような意味での質問

e. 変な言葉遣いをした人に、冗談半分で、それは一体どこの地方の言葉ですか、というような意味での質問

(23)に見られるような違いはすべて関連性の概念で扱えるが、直接発話行為と間接発話行為の区分によっては説明不可能である。

では直接発話行為と間接発話行為に代わる、コミュニケーションの捉え方にはどういった視点があるかと言えば、それはSperber and Wilson（1986:59-60, 1995:59-60）の提案する「強いコミュニケーション（strong communication)」と「弱いコミュニケーション(weak communication)」の概念であろう。この「強い」と「弱い」は連続的な段階(gradient)をなす。この場合の「強い」と「弱い」は情報意図を伝達意図にまで高めて明示的にすることの「強さ」と「弱さ」を示すものであ

る。次の各例をこの「強さ」と「弱さ」の観点から眺めてみよう。

(24) a．窓を開けることを要求します。
b．窓を開けてくれる？
c．窓を開けていただけませんか？
d．ここは暑すぎますね。
e．（独り言的に）暑い！
f．（何も言わず、ひたすら汗をかいている）

(24 a)から(24 f)に行くに従って、情報意図の明示性は弱くなって行く。(24 a)はまるで裁判官が被告に向かって言っているような調子の発話だが、「要求する」という遂行動詞を用いている点で、話し手の「メタ語用論的な自覚（meta-pragmatic awareness)」のもっとも高い発話であり、この中ではもっとも「強いコミュニケーション」となっている。(24 b)と(24 c)はどちらも「～クレル系」の授受動詞を補助動詞として使っているが、(24 c)には「否定」と「敬語」が追加されることにより、要求そのものの伝達意図がより弱められていると言える。(24 d)は非慣習的であり、第一節で検討したように、聞き手の側の関連性解釈、および好意的気配りを含む「発話媒介行為の適切性原理」に基づく解釈と行動が選択されることになる。(24 d)の「暑すぎ」の「すぎ」や発話の末尾の対人関係的モダリティ「ね」も、聞き手の関連性解釈を促進することになるだろう。その点で(24 e)は(24 d)より弱いコミュニケーションと言える。(24 f)は情報意図に無関係であるから、もはやコミュニケーションではない。しかし、「発語媒介行為の適切性原理」に含まれる好意的気配りによって、汗をかいている相手の姿を見た人は「窓を開ける」などの行動を取ることが十分考えられる。その意味で、(8)で仮定した「発語媒介行為の適切性原理」は言語・非言語、コミュニケーション・非コミュニケーションを問わず、社会的人間としての行動原理であると言えるだろう。それが、「強いコミュニケーション」だけではなく「より弱い言語的コミュニケーション」による事例をも説明する原理としてはたらくと結論づけて良いと思われる。

4. む す び

Searle (1975) の間接発話行為は、コミュニケーションにおける発語内行為の複層性を指摘した点において優れた概念の一つではあるが、一次的発語内行為を容易に同定できる慣習的な場合を除いて、コミュニケーションのダイナミズムを包括的に捉えるには不十分な概念であると言わざるをえない。非慣習的な事例については、コンテクストとそれに基づく聞き手の想定による推論が不可欠であり、そのような場合には、聞き手の解釈の過程に重点を置いた新しい語用論としての関連性理論の視点がより有効であることを示した。関連性理論によれば、話し手の意図明示的発話は「関連性の見込み」を伝達しているはずであるとの前提に立ち、聞き手は、もっとも処理コストの少ない推論過程を経て最適関連性を得ようとするとされる。ムード構造と発語内行為との関係に基づく「直接」・「間接」という分類の代わりに、本稿では、関連性理論の提案する「より強いコミュニケーション」から「より弱いコミュニケーション」へという段階的捉え方がより有効であることを示した。

関連性理論は「想定の集合」の中から「当該の推論に必要な想定だけを選ぶ」という考え方を取っている点できわめて独特なコンテクスト観を持っている。しかし、一方で、コンテクスト構成要素の分類に関しては、選択体系機能理論やVerschueren(1999)の語用論がより厳密な研究を進めているとも言える。本稿では福田(1998)でのコンテクスト論を含め、現代言語学で提案されているいくつかのコンテクスト論を紹介し、それらを比較した。

さらに、コミュニケーション研究でこれまで軽視されてきた「発語媒介行為」に注目し、特に「より弱いコミュニケーション」の意味解釈に後続、あるいは随伴し、おそらくは、それに影響を与える「発語媒介行為の適切性原理」を提案した。これは一種の気配りの原理であり、言語的コミュニケーションだけではなく社会的存在としての人間の行動原理とも言えるものである。われわれは発話に対する反応として発話を返しているだけではなく、自らの発話が聞き手側に生み出した発語媒介行為に対応する形であらたな発話を選んでいることも多いのである。

今後の課題として、本稿第2節で議論したコンテクストの諸相が実際のテクストの中にどのように具現しているかを明らかにする作業が残されている。

【注】

本稿は「日本機能言語学会・第9回春期例会」(2003年6月14日、新潟大学）でのシンポジウム「言語とコンテクスト」において口頭発表したものに加筆・修正を施してまとめたものである。司会の労を取っていただいた東北大学の山口登教授にあらためて感謝申し上げる。また、フロアから有益なご指摘を下さった先生方、会の準備に協力してくれた新潟大学の院生・学部生諸君に、厚く御礼申し上げる。

（1） Sperber and Wilson の2種類の関連性原理（Principle of Relevance）は以下の通りである。

1. Cognitive Principle of Relevance: Human cognition tends to be geared to the maximisation of relevance. (Sperber and Wilson 1995:260)

2. Communicative Principle of Relevance: Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (Sperber and Wilson 1995:260)

（2） Sperber and Wilson による「関連性」の分類的定義は以下の通りである。
Relevance to an individual (classificatory): An assumption is relevant to an individual at a given time if and only if it has some positive cognitive effect in one or more of the contexts accessible to him at that time.
(Sperber and Wilson 1995:265)

（3） Sperber and Wilson による「情報意図」と「伝達意図」の区別は以下の通りである。

1. Informative Intention: to make manifest or more manifest to the audience a set of assumptions I (Sperber and Wilson 1995:58)

2. Communicative Intention: to make it mutually manifest to audience and communicator that the communicator has this informative intention. (Sperber and Wilson 1995:61)

【参考文献】

Austin, J. L. (1962) *How to Do Things with Words.* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press. 坂本百大（訳）(1978)『言語と行為』東京：大修館.

Brown, P. and S. C. Levinson (1978) *Politeness: Some Universals in Language Usage.* Cambridge: Cambridge University Press.

福田一雄（1996）「関連性理論と非字義的発話の伝達過程」『新潟大学言語文化研究』第2号、pp. 15-29.

福田一雄（1998）「日本語のマキシム・ヘッジとマキシム・ブースター — 語用論的言語学の一視点 —」『人文科学研究』98輯（新潟大学人文学部）pp. 21-42.

福田一雄（2002）「文法的メタファーとは何か — M. A. K. ハリデー（1994）第10章をめぐって —」『英文学会誌』第29号（新潟大学英文学会）pp. 35-54.

Grice, H. P.（1975）"Logic and Conversation" in Cole, P. and J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics.* Vol.3. New York: Academic Press, pp. 41-58. 清塚邦彦(訳)（1998）『論理と会話』東京：勁草書房、pp. 31-59.

Halliday, M. A. K.（1994）*An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold. 山口　登・筧　寿雄(訳)(2001)『機能文法概説 — ハリデー理論への誘い』東京：くろしお出版.

Halliday, M. A. K. and R. Hasan（1985）*Language, Context, and Text: Aspects of Language in a Social-Semiotic Perspective.* Geelong, Victoria: Deakin University. 筧　寿雄(訳)（1991）『機能文法のすすめ』東京：大修館.

今井邦彦（2001）『語用論への招待』東京：大修館.

Leech, G. N.（1983）*Principles of Pragmatics.* London: Longman. 池上嘉彦，高司正夫（訳）（1987）『語用論』東京：紀伊国屋書店.

Searle, J. R. (1975) "Indirect Speech Acts" in Cole, P. & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics.* Vol. 3. New York: Academic Press, pp. 59-82.

Searle, J. R. (1993) "Metaphors" in Ortony, A. (ed.) *Mataphor and Thought*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 83-111.

Sperber, D. and D. Wilson（1986）*Relevance: Communication and Cognition.* 1st Edition. Oxford: Blackwell. 内田聖二・中遠俊明・宋　南先・田中圭子(訳)(1993)『関連性理論 — 伝達と認知 —』東京：研究社.

Sperber, D. and D. Wilson（1995）*Relevance: Communication and Cognition.* 2nd Edition. Oxford: Blackwell.

Verschueren, J.（1999）*Understanding Pragmatics.* London: Arnold.

山口　登（2000a）「選択体系機能理論の構図 — コンテクスト・システム・テクスト —」小泉　保（編）『言語研究における機能主義』東京：くろしお出版、pp. 3-47.

山口　登（2000b）「西光氏への回答」小泉　保（編）『言語研究における機能主義』東京：くろしお出版（第Ⅱ部「誌上討論会」）、pp. 185-192.